

自由応募分科会 1 アジアにおける性的マイノリティの政治：家族・宗教・国家  
報告 3

宮脇聡史（大阪大学）

フィリピンにおけるカトリック教会にとっての性をめぐる価値観の「外来性」と政治  
“Foreignness” of Values and its Political Significance on the Issues of Reproduction and  
Sex for Catholic Church in the Philippines

フィリピン・カトリック教会は歴史的に、土着の性風俗・倫理を「出産のための性」の規範から厳しく取り締まろうとしてきた。反面、特にアメリカが植民地宗主国になって以降の教会は、その自由主義的な統治を警戒し、スペイン統治時代に形成されたカトリック多数派の「理想化」された姿を「本来のフィリピン人」のあり方とし、その立場から、昨今の性を含めた社会風俗の「墮落」は、アメリカによって、さらに独立後はグローバルな性解放イデオロギーの策謀によってもたらされてきた、と批判してきた。教会はそこに「フィリピンになじまない外来の思想」を押し付ける「植民者の支配の論理」があると主張し続け、「フィリピンのあるべき姿」を根拠に、性的少数者の権利保護の問題も含め、性と生殖を巡る諸政策への手を尽くした反対、抵抗、妨害を展開してきた。

本発表は歴史も踏まえつつ特に 1970 年代以降のカトリック教会による、国の性と生殖関連の諸政策をめぐる「外来性」や「グローバルな計略」に対する反発を、主に教会の公文書の分析により明らかにする。同時に自らの対策の中にも表れる本来的だが同時に対抗的ともいえる「外来性」「グローバルな戦略」についても、実際の性と生殖を巡る活動のネットワークと系譜を示すことで明らかにする。このようにして、教会の影響力がなお無視できないフィリピンにおいて、性と生殖を巡る政治が、フィリピンというローカリティをめぐる複数のグローバルのせめぎ合いの政治として生じている様を示す。